

博士学位論文審査要旨

2007年6月25日

論文題目： 対人関係の発展過程における表情表出に関する検討

学位申請者： 山本 恭子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 鈴木 直人

副査： 文学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 文学研究科 教授 余語 真夫

要 旨：

本論文は、対人関係の発展過程において表情がどのように表出されるのかを明らかにするとともに、表情表出を導く要因を検討したものである。第1章では、表情表出に関する主要な理論的立場（“感情表出的視座”と“行動生態学的視座”）を中心に、表情表出研究において社会的要因が注目されるに至った歴史的背景を概観した。第2章では、本論文の一つの柱である、対人関係の形成や維持にとって重要な“他者との関係性”の要因を検討すべく、表情表出に及ぼす社会的要因の影響に関する先行研究を概観した。

第3章では、3つの研究により未知関係と友人関係の表情表出の比較を行った。主要な検討課題の1つ目は、表情表出に対する二者間の社会的相互作用の効果、2つ目は、表情表出を導く主観的変数としての社会的動機の関わり方であった。その結果、喚起された感情価に関わらず、友人の存在が笑顔の表出を促進すること、また、この促進効果は、接近的な社会的動機の高まりや、二者間の社会的相互作用を反映していることが示唆された。

第4章では、未知の関係から知り合いへと対人関係が形成される過程を対象として、2つの研究を行った。先行研究は友人関係と未知関係を比較するにとどまり、関係性の発展という視点を欠いていた。その結果、関係性の形成に伴って、笑顔の表出および笑顔の同時生起頻度が増加することが示された。また、関係性の形成過程においては、回避的な社会的動機づけの低減が、笑顔の表出の増加に寄与することが示唆された。

以上の結果を総合して、第5章では対人関係の発展過程における表情表出と社会的動機の間を考察した。笑顔の表出量は関係のでき始めには増大するが、その後関係性の深化が進まない場合はそれほど増加しない。しかし、関係性がより深化するとさらなる増大を示すと考えられる。社会的動機が笑顔の表出への関与の仕方は、関係性の初期とすでに関係が構築された後では異なり、関係性の形成初期には回避的な社会的動機が笑顔の表出に関係し、関係性が構築された後には接近的な社会的動機が笑顔の表出に関係することが示された。これらの結果および考察にもとづき本論文では、表情表出の研究は、感情的側面だけでなく社会的動機も考慮する必要があること、そして表情表出を個人内の情報提供という一方向的なものではなく、他者との相互作用による双方向的なものとしてとらえることが新しい表情表出理論を構築するのに重要であることを指摘した。

以上のように本論文は、対人関係の発展過程において表情がどのように表出されるのかを明らかにした研究であり、表情研究に新機軸を与えるものである。また、この博士論文の一部を構成する研究は、社団法人日本心理学会 2006 年度優秀論文賞を受賞しており、学会でもみとめられたものである。よって本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を

有するものと認める。

総合試験結果の要旨

2007年6月25日

論文題目： 対人関係の発展過程における表情表出に関する検討

学位申請者： 山本 恭子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 鈴木 直人

副査： 文学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 文学研究科 教授 余語 真夫

要 旨：

上記審査員3名は、2007年5月30日午後6時00分から約2時間にわたり、学位申請者に面接試問を行った。提出論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的価値が実証された。さらに申請者は心理学一般についての十分な知識を有することが認められ、語学(英語)についても十分な学力を確認することができた。また、本論文の主な内容は、国内外の専門誌に掲載するとともに、国際、国内の各学会、研究会で報告をしており、極めて高い評価を得ている。

以上より、本論文提出者は専門ならびに語学ともに十分な知識、学力を有しているものと判断する。

博士學位論文要旨

論文題目： 対人関係の発展過程における表情表出に関する検討
氏名： 山本 恭子

要 旨：

私たちは社会的場面において、常を感じたままに感情を顔に表出するわけではなく、その場の状況や相手に応じて、弱めたり、強めたり、他の表情で真の感情を覆い隠すなどして表出を制御している。特に、他者との関係性によって表情表出を調整することは、新しい対人関係の形成や構築された関係性の維持に、必要不可欠であると考えられる。そこで本論文では、関係性の発展過程において表情がどのように表出されるのかを明らかにし、社会的場面において表情表出を導く要因を検討することを目的とした。

第1章では、表情表出に関する主要な理論的立場（“感情表出的視座”と“行動生態学的視座”）を中心に、社会的要因が表情表出に及ぼす影響が注目されるに至った歴史的背景を概観した。これら2つの理論の対立は現在も続いているものの、どちらも他者の存在といった社会的要因が表情表出に影響することは認めている。したがって本論文では、これら2つの理論を対立させて検討することはせず、両理論がともに認める社会的要因が表情表出に及ぼす影響を精査することを目的とした。

第2章では、社会的要因が表情表出に及ぼす影響について検討した先行研究の整理を行った。先行研究では、感情喚起場面に他者が存在する場合と他者が存在しない単独の場合での、実験参加者の表情表出の違いを比較するというパラダイムを用いてきた。Wagner & Lee (1999) は、他者の存在が表情表出に及ぼす効果を説明する要因として、“他者との関係性”と“他者の役割”の要因をあげている。“他者との関係性”により表情表出を制御することは、対人関係の形成や維持にとって重要であると考えられることから、本論文ではこの要因に注目した。先行研究での問題点を踏まえ、本論文では以下の点を主要な検討課題とした。1つは、表情表出に対する二者間の社会的相互作用の効果に注目することであった。先行研究では、実験場面に存在する他者を相互作用のないパートナーとして扱ってきた。しかしながら、二者が同じ場面に存在する場合、パートナーに向けて表情を表出したり、パートナーの表出を参照して自分の表情を調整するといった、社会的相互作用が生じる可能性が考えられる。そこで、二者間の社会的相互作用を反映する新たな指標の導入や、実験操作によって、社会的相互作用が表情表出へ果たす役割を検討した。2つ目は、表情表出を導く主観的変数として、社会的動機の関わり方を検討することであった。社会的動機は、他者の存在に対する意識や、他者とコミュニケーションしたいという欲求など、社会的状況についての個人の評価と定義されている (Manstead & Fischer, 2001)。社会的動機を検討することは、特定の社会的状況において表情表出が何故表出されるのかを明らかにする一助となると考えられる。3つ目は、未知関係から友人関係へと関係性が発展する過程における表情表出の変化を包括的に検討することであった。これまでの研究では、友人関係と未知関係の比較によって他者との関係性の影響を検討するにとどまり、関係性の発展という視点を欠いていた。

第3章では3つの実験を通して、未知関係と友人関係の表情表出の比較を行い、社会的動機や二者間の社会的相互作用が表情表出の発現とどのような関わりを持つかを明らかにした。研究1では、友人あるいは面識のない他者の存在が、快感情および不快感情喚起場面での表情表出に及ぼす影響について、二者間の社会的相互作用という観点から検討した。その結果、快感情喚起中だけでなく不快感情喚起中にも、友人の存在が笑顔の表出を促進することが示された。また、笑顔の同時生起、すなわち二者間の社会的相互作用を反映する指標において、友人関係の方が未知

関係よりも高い値を示した。社会的動機に関しては、友人関係の方が未知関係よりも“他者の感情が気になった程度”や“感情の共有要求度”が高かった。これらの結果は、接近的な社会的動機の高まりや二者間の社会的相互作用が、笑顔の表出の促進に寄与する可能性を示唆する。

研究2では、感情喚起刺激呈示中に加えて刺激呈示後の表情表出も対象として、他者との関係性が表情表出に及ぼす影響を検討した。刺激呈示後は、刺激によって喚起された感情が持続しており、且つ視線を自由に動かすことができるため、コミュニケーション行動としての笑顔や視線がより表出されると考えた。その結果、笑顔の表出量は、友人関係や未知関係では刺激呈示後期間の方が呈示中期間よりも多かったのに対し、単独の実験参加者では刺激呈示中期間の方が多かった。特に、この効果は不快刺激に対して顕著に認められた。また、視線の表出量も、不快刺激呈示後期間の方が快刺激呈示後期間よりも多かった。これらのことから、不快刺激呈示後には、パートナーに対する親和行動として、笑顔や視線の表出が生起したと考えられる。しかしながら、眉しかめの表出は、研究1と2の両方で、他者との関係性による違いが認められなかった。

研究3では、社会的相互作用の効果をさらに明確にするため、友人関係または未知関係の二人が隣り合って感情喚起映像を視聴する条件（衝立なし群）と、二者間に衝立を設け二者間の社会的相互作用が不可能な条件（衝立あり群）での比較を行った。実験の結果、笑顔の表出や同時生起は、衝立あり群よりも衝立なし群において多かった。衝立なし群の実験参加者は、パートナーの表出を参照することで、笑顔の表出を促進していたと考えられる。研究1、2と同様に、関係性による笑顔の表出や同時生起の差も認められ、友人関係の方が未知関係よりも高い値を示した。一方、眉しかめの表出は、衝立なし群では友人のペアよりも未知のペアにおいて多かったのに対し、衝立あり群では友人のペアと未知のペアの差は有意でなかった。この結果は、眉しかめにおける社会的相互作用の効果が、存在する他者との関係性によって異なることを示唆する。

第4章では、未知関係から知り合いへと対人関係が形成される過程を対象として、表情表出や社会的動機の変化を検討した。出会いから初期の対人相互作用が、後の関係性の発展や崩壊に重要な役割を持つという Berg & Clark (1986) の指摘を鑑みれば、未知関係から対人関係が形成される初期の過程を検討することは意義深いと考えられる。研究4では、面識のないペアにおいて、その場でコミュニケーションが終わるのか、その後も相手とのコミュニケーションが続くのかといった、将来の相互作用の期待の有無が、快および不快映像呈示中の表情表出に及ぼす影響を検討した。期待あり群では、映像呈示後に二者間で会話を行ってもらう旨をあらかじめ教示することで、後の相互作用を期待させる一方、期待なし群では映像を呈示する旨のみを教示した。実験の結果、笑顔と眉しかめともに、相互作用の期待がある場合の方がいない場合よりも表出量が多かったが、有意な差ではなかった。社会的動機に関しては、“自己の行動に対する評価懸念”において、期待あり群の方が期待なし群よりも得点が低いという結果が得られた。このことから、相互作用の期待はコミュニケーションに対する接近的な動機づけを高めるというより、評価懸念のような回避的な動機づけを減じる効果を持つと考えられる。

研究5では、関係性の形成に伴う表情表出および社会的動機の変化を検証するため、初対面のペアに1週間おきに計3回の実験に参加してもらい、快感情喚起刺激の呈示中期間および呈示後期間の表情表出と社会的動機を測定した。その結果、笑顔の表出および同時生起は、実験1回目から2回目にかけて大きく増加することが示された。この結果は、対人関係の極めて初期に後の関係性の発展が決定づけられてしまうとする“関係性の初期分化現象 (Berg & Clark, 1986)”を支持するように思われる。社会的動機に関しては、“他者の存在が気になった程度”と“自己の行動に対する評価懸念”の得点が、実験1回目から2回目にかけて低減した。これらの結果から、関係性の形成過程においては、評価懸念のような回避的な動機づけの低減が、笑顔の表出に重要であると考えられる。

以上の結果を総合して、第5章では関係性の発展過程における表情表出と社会的動機の変化を要約した。笑顔の表出量は関係性の初期に増大し、知り合いの初期にはあまり表出量が変化せず、

より関係性が深化するとさらなる増大を示すと考えられる。社会的動機は、関係性の初期とすでに関係が構築された後で異なることが明らかとなった。接近的な社会的動機は、未知関係から知り合いの初期ではあまり変化しないが、関係性が友人に向かうと高まるのに対し、回避的な社会的動機は、未知関係では高く、関係性が形成されるといったん減少し、関係性がさらに深まり友人関係になると高まると考えられる。また、笑顔と眉しかめの表出では、表情表出を導く要因が異なることが示唆された。笑顔の表出は、主に社会的動機や二者間の社会的相互作用によって表出され、コミュニケーション・ツールとしての働きが大きいと考えられる。一方、眉しかめの表出は、他者との関係性や社会的動機によってほとんど影響されなかったことから、表示規則やその場の状況など他の要因が関与する可能性が考えられる。表情表出の新たな理論構築に向けて、感情と社会的動機の両方の要因を考慮することや、表情表出を個人内の情報提供という一方向的なものではなく、他者との相互作用による双方向的なものとしてとらえることの重要性が議論された。